

## 連載 プロマネの現場から 第 88 回 ブダペストとポランニー家

蒼海憲治(大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

今年は 6 月に、一足早い夏休みをいただいて、ハンガリーのブダペストに行ってきました。

ブダペストは、ドナウ川の下流に向かって右岸の王宮のあるブダと、左岸には市場や市街地が広がるペシュト、さらにブダの南側にあるオーブダという大きく 3 つの町から成り立っています。18 世紀末までは、別々に歩んできた町が一つになってできた都市でした。その理由は、18 世紀末まで、2 つの町をつないでいたのは浮橋であり、しかも、日に 2 回、ドナウ川を通行したい舟のために、中央部を開閉せねばならないため、その間は対岸に渡ることはできませんでした。そのため、固定した橋ができるまで、各々独立した町として発展してきました。現在、セーチェーニ鎖橋、マルギット橋、自由橋など多くの橋がかけられている様子からすると隔世の感があります。

今回の旅行の目的の一つは、ペシュトの繁華街にある「カフェ・ニューヨーク」を訪ねることでした。

19 世紀末から 20 世紀初頭の一時期、ブダペストのカフェには、後の天才たちが集まった、といわれています。「カフェ・ニューヨーク」は、彼らが集った伝説・憧れのカフェでした。

当時、このカフェに集ったといわれているのは、

経済人類学の祖となったカール・ポランニーと、その弟で、科学哲学者のマイケル・ポランニー（ハンガリー語の読みだと、日本語と同様に、姓・名の順のため、各々、ポラーニ・カーロイ、ポラーニ・ミハイとなりますが、ここでは、西歐式で記述します）、

アディ・エンドレ、ジョルジュ・ルカーチ、バラージュ・ベーラ、フォガラシらの文学者、  
バルトク・ベーラ、コダーイ・ゾルタンらの音楽家、

ローハイム・ゲーザらの精神分析学者、

レオ・シラード、エドワード・テラー、オイゲン・ウィグナー、ジョン・フォン・ノイマンらの自然科学者たちがいました。

この時期のハンガリーは、ノーベル賞の出身国別の輩出率で、世界一だったようです。この状況を、アイザック・アシモフは、こう揶揄しています。

「我々の間で、地球には 2 種の知的生命体が存在するといわれている。人間と、ハンガリー人である」と。

このうちの一人に、「ノイマンは人間そっくりだが、本当は宇宙人」と陰口を叩かれるほどの天才で、IT 技術者にとっては一番なじみの深い、フォン・ノイマンがいます。

ブダペストが、第 1 次世界大戦をはさむ 20 年の間に、科学的な才能の持ち主を並外れて多く

生み出したその原因はどこにあったのか。

フォン・ノイマンは、いくつかの文化的な要因が重なった、と後に語っています。

《・・・中央ヨーロッパのその部分の社会全体にかかった外的圧力、  
個人における極端な不安定さが無意識的に感じられたこと、  
そして異常さを産み出しあるいは絶滅に向き合うことの必要性が、重なったのである。》（※1）

《第1次世界大戦は、それまで続いてきた経済的および社会的な様式を粉砕した。  
オーストリアーハンガリー帝国の第2の首都としての栄光の過去を持つ都市である  
ブダペストは、この頃、小国の主要都市に過ぎなかった。

多くの科学者にとって明白になっていたのは、より不自由さが少なく田舎的な環境の  
どこか別の場所に、生活できる場所を見つけて移住しなければならなくなるだろうという  
ことだった。》（※1）

このあたりの事情を、栗本慎一郎さんは『ブダペスト物語—現代思想の源流をたずねて』（※2）の中で、こう解説されています。

彼らに共通したことは、ユダヤの血統であれ、純マジャール系であれ、みな「愛国」や「マジャールの伝統」を一度は旗印にしていた。彼らの愛国は、ショービニズム（排外的な愛国主義）ではなかった。そして、意外なことに、マジャール民俗文化への志向を主張していたものの多くはユダヤ人でした。彼らの多くは1880年代の同世代に生まれ、第一次世界大戦前後の政治的激動の中で、ブダペスト大学を中心とした先進的学生の実践運動団体と関係を持っていました。

19世紀後半から20世紀にかけて、ブダペストの人口は急増します。

《まず、ブダペスト人口の急増の中核は、バルカンの激動の中からはじき出されたユダヤ人たちをはじめとする“異邦人”によって形成されているものだ。》（※2）

彼らは「ブダペストへ亡命してきた者たち」だった。

そして、彼らが持っていたのは、超領域的知への志向でした。

ガリレイ・サークルの初代委員長は、カール・ポランニーでしたが、ブダペスト出身のユダヤ知識人で、＜西欧的＞でなかった人々は、いずれも超領域的でした。ポランニー兄弟はいうまで

もなく、シラード、ノイマン、ウィグナーなどはすべてそうであった、といます。

西欧の知識人の多くが、民族文化や、思想に対して民俗を軽視し、より積極的に排除していたこととは対極的でした。

でも、グローバル化している現代において、ショービニズムではない民族性や民俗性を保持することは、逆に見直すべき価値観の一つではないでしょうか。そして、かつてのブダペストの知識人が持とうとした超領域的知への志向と、民俗文化への志向という視点は、非常に貴重ではないか、と考えています。

ところで、綺羅星のごとく並ぶブダペストの天才たちですが、その中で、個人的に一番興味があるのは、栗本さんの影響ではないですが、ポランニー兄弟です。

ポランニー兄弟については、経済評論家のピーター・ドラッカーさんの回想録に、面白いエピソードがあります。

一番印象的だったのは、若き日のドラッカーさんが体験した、ポランニー族との生涯最低のクリスマス・ディナーの話でした。

カール・ポランニー家にクリスマスの日に招かれて、ドラッカーさんが食べた夕食は、ちゃんと茹でられてもいないジャガイモのみでした。経済人類学の大著、『大転換』を著す前でしたが、オーストリア・エコノミスト誌の最高の聞き手で、高給取りだったため、「なぜこんな食事なのか？」と、ドラッカーさんは疑問を呈します。これに対して、ポランニーの家族は啞然として、「給与を自分のために使うなんてとんでもない。ウィーンはハンガリー難民であふれているのですよ！」と怒られた、といます。

ドラッカーさんによる、ポランニーの5兄弟姉妹の活躍には目を見張るものがあります。

オットー・ポランニー（長男）

機械の設計者から実業家となる。

熱烈なマルクス主義者となり、社会主義の新聞「アヴァンティ」を発刊、

ベニート・ムッソリーニを主筆に迎えたが、第一次大戦により、社会主義者としての夢を打ち碎かれる。

アドルフ・ポランニー（次男）

技術者から鉄道家となり、ブラジルの鉄道建設に携わる。  
ブラジルが非白人の未来社会となることを夢見るが破れる。

モウジー・ポランニー（長女）

ハンガリー民族運動、農民、民芸、民謡、民話の復興運動のスター。  
19歳で、農村社会学と運動を先導し、チトーやイスラエルのキブツへも影響を与える。  
その後、一切の公的活動から手をひいた。

カール・ポランニー（三男）

『大転換』において、産業革命の歴史を書き換えようとした。

≪イギリスの社会と経済を転換させたものは、機械の力ではないとした。  
直前の世界貿易の急拡大でも、さらにその前の17世紀から18世紀にかけて  
起こった農業革命のせいでもないとした。

それは、自由主義体制が、財と資本のみならず、  
土地と労働という2つの生産要素まで扱うようになったためであるとした。≫（※3）

≪彼の目指したのは、  
市場が、唯一の経済システムでもなければ、最も進化した経済システムでもないことを明らかにすることだった。  
そして、経済発展と個の自由を両立させつつ、経済と社会を調和させる場は、市場以外にある  
ことを示すことだった。≫（※3）

文化人類学と原始経済研究において、一大権威となった。

≪しかし、カール自身は、いわば失意の人だった。

先史学や文化人類学は、資本主義と社会主義を超えたよき社会の探求の手段にすぎなかった。  
彼が経済史から得ようとしたものは、未来への鍵だった。  
だが彼の得たものは、何の役にも立たない過去だった。≫（※3）

マイケル・ポランニー（四男）

アインシュタインの下で働き、ノーベル賞候補に擬せられ、化学賞か物理学賞のいずれか、と言われる。

ところが、第二次大戦中に大きく関心を変え、哲学者となります。

《マイケル・ポランニーにとって、人間の実存とは孤立した個としての実存だった。

しかも、その個たるべき人間は、論理と因果律ではなく、価値と倫理に基盤を置くべき存在だった。

その問題意識と解答を端的に表明したものが、彼の最も有名な著作「ニヒリズムを超えて」だった。》（※3）

そして、ストア派の哲学者になってしまった、といます。

《彼ら全員が別の道を歩いた。

求めたものは同じだった。

それはちょうど、聖杯を求めて旅立った円卓の騎士たちを思い起こさせた。

彼らの全員が答えを見つけた。

そして全員が、見つけたものが答えでないことを知った。

世間一般の尺度によれば、彼らほどの成功者はいなかった。

同時に、彼らの自身の尺度によれば、彼らほどの失敗者はいなかった。・・》（※3）

《彼らの全員が「社会による社会の救済」を信じていた。しかし、やがて諦めさせられ、落胆させられていった。》（※3）

というように、とても、感動的な表現がされています。

しかし、私にとって衝撃的だったのは、このドラッカーさんの見たポランニー家の評伝がいかにも間違っていたか、ということ、『ブダペスト物語』で読んだときでした。

そもそも、長男のオットー・ポランニーは存在せず、ムッソリーニのパトロンではなかった。

アドルフ・ポランニーは、ブラジルにわたったが、一事業家としてであり、新生ブラジル運動の指導者ではなかった。

モウジー・ポランニー・ラウラは、美貌の才媛であったが、チトーにも、オッペンハイマーにも影響を与えた事実はない。

ただし、ポランニー家は、もともとロシアの出身であったし、強固な意志の母親セシル（セシルママ）がいたため、ロシアからブダペストにやってくる革命家たちは皆ポランニー家の世話になった、といます。

ドラッカーさんが、カール・ポランニー家での食べた生涯最低のクリスマス・ディナーは、両親と同様、カールも自身の給料を、革命家への支援をしていたためだった、と指摘しています。

ドラッカーさんの楽しい思い出話は、どうも記憶違いのようでした。

ところで、ドラッカーさんに、ストア派の哲学者になってしまったといわれたマイケルですが、その思想は、実はとても興味深いものです。『暗黙知の次元』や『個人的知識』などで、マイケルが志向したのは、「正常であることへ戻る欲望」であり、それは、分野毎に細分化された科学の諸理論をアブノーマルとみなし、ガリレイ・サークル等のブダペストのカフェ文化が育んだ超領域的知であったのでは、と考えています。そして、その姿勢は、いまでも参考になるのではないか。午後10時でもほの明るいブダ側にあるゲッレールトの丘で、日没を待ちながら、そんなことを考えていたのです。

(※1) 『数学者列伝3 オイラーからフォン・ノイマンまで』 (シュプリンガー数学クラブ)  
訳・蟹江幸博、丸善出版、2012年刊

(※2) 栗本慎一郎『ブダペスト物語—現代思想の源流をたずねて』晶文社、1982年刊

(※3) 『ドラッカー わが軌跡 知の巨人の秘められた交流』訳・上田惇生、ダイヤモンド社、2006年刊